

エグゼクティブのための知的情報誌

AGORA

アゴラ
The Executive
Lifestyle
Magazine

11

November
2014

AGORA Special Amazon

優雅なる冒険

Travel in Japan Tokyo

隅田川、青の時間



JAPAN AIRLINES



メジャー インターナショナル エアライン部門
JAL 世界第一位
メジャー エアライン ネットワーク部門
JAL グループ 世界第一位



る 冒 険

AGORA Special vol.273

Peru

鬱蒼と茂る熱帯の樹木と、太古から続く生命の循環を支える褐色の大川アマゾン。その源流は、地球上に残された数少ない未踏の地のひとつだ。人の叡智も及ぶことなく、長年、冒険家ですら憧れてきた場所。しかし、ラグジュアリーシップの登場で、新たな扉が開かれた。アマゾン川クルーズ——優雅なる冒険が今、始まろうとしている。

鈴木博美・文 Ryoichi Sato・撮影
Text by Hiroshi Suzuki Photo by Ryoichi Sato

優雅な

Birthplace of the Amazon





アマゾンで迎える朝

アマゾンの変遷をゆく「アリア・アマゾン」。全長45m・全幅9m、16部屋の「アマゾン川」に浮かぶ5つ星ホテルだ。



早

朝五時。普段よりも少し早い目覚めは、旅の高揚感のせいだろうか。身支度を整え、展望デッキのテイベッドに腰をおろす。日の出前の爽やかな風を受けながら、聞き覚えのない鳥の鳴き声に耳を傾けていると、つい一昨日までのせわしない日常が、遠い過去の記憶のように思えてくる。

幼かった頃、テレビで放映される大自然の番組が好きだった。箱の中に映る、あまりにも神秘的な世界に心を奪われたことを、雄大な景色を目の前にして思い出す。デッキでしばらく佇んでみると、濃紺色に包まれていると、景色が、刻一刻と赤く染まりだし、見たこともないような大きな太陽が水平線から昇ってきた。すると目の前に映る全てものを飲み込むかの

ように、真っ赤に染め上げた。冒険の始まりには申し分のない、ドラマチックな幕開けだ。

ペルーの首都リマから空路で約二時間。アンデス山脈を越えて、アマゾン川クルーズの玄関口として、世界中から訪れる冒険者を迎える町、イキトスに降り立ったのは昨日の夕方のことだ。一年を通じて過ごしやすい太平洋沿岸のリマとはがらりと変わり、じんわりと肌にとわりつく湿度。そして汗ばむ気温の高さが、ジャンクルに来たことを身体に告げている。

ペルーは、天竺都市として名高いマチュピチュの存在からか、高地のイメージが強いが、国土の約六割は熱帯のジャングルに覆われ、アンデス山脈の雪解け水を水源とする大河アマゾンも、実はペルーから始まる。

空港内のターミナルビルでは、「アクア・エクスベディションズ」のクルーがすでにゲストの到着を待っていた。アメリカ、ドイツ、ペイン、アルメニア、オーストラリア、そしてペルーからと国際色豊

左・中/船上でいただく朝食は、また格別のものがある。今日一日への期待を込めて。右/アマゾン川流域は様々なフルーツの産地だ。

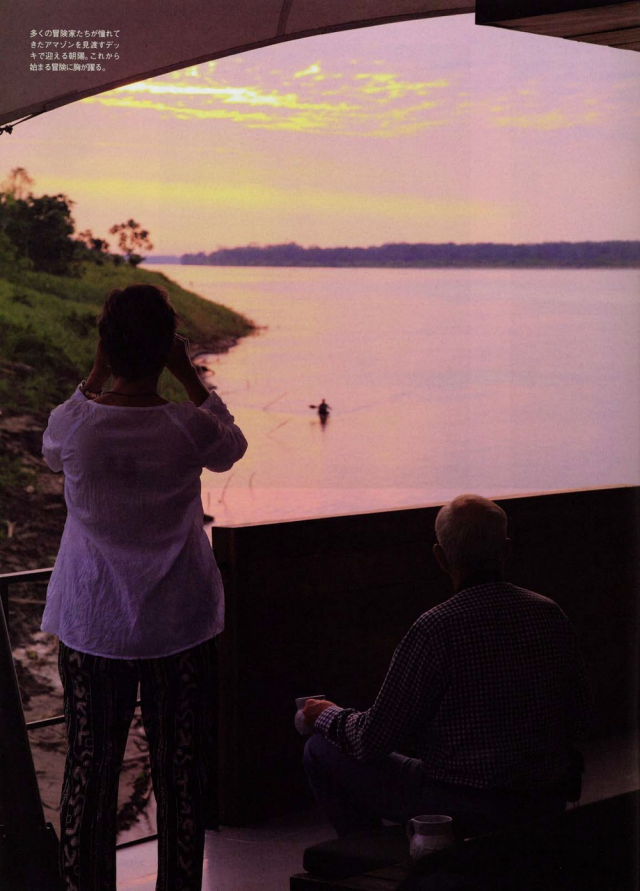


かな総勢二五名の冒険者たちを専用車に乗せて、クルーズ船が停泊するさらに上流の小さな町ナウタへと走らせる。

日も落ちた車窓からは、静寂に包まれた熱帯の木々がシルエツトとなつてどこまでも続かのように流れる。エキゾチックな景色を眺めているうちに、これから始まる冒険クルーズへの高揚感にじわじわと包まれてゆく。

棧橋では、四日間の冒険を共にする「アリア・アマゾン」が、我々の到着を待っていた。マッドな黒と磨かれたチーク材のボディは、デザインホテルのように流麗な外観が際立っている。全長四五メートルに、客室はわずか一六室。全面ガラス張りのパノラマウインドーからは、アマゾンの景色を、ベッドに横たわらなるとも楽しめる。また独立型のバスルームでは、二四時間、いつでも熱いシャワーが浴びられるなど、快適に過ごせる上質な客間造りは「船上の五つ星ホテル」の冠に値するリバークルーズシップだ。

多くの冒険家たちが憧れて
きたアマゾンを見送すデッ
キで迎える朝陽。これから
始まる冒険に胸が躍る。



Birthplace of the Amazon



太古より続く神聖な世界

ボートを下りてジャングルをゆくと、直径3mものオオオニバスの繁殖地へ辿り着く。スイレン科の水生植物で、夕方いっせいに花が咲くという。



ゲ

ストを乗せた「アリアアマゾン」は、アマゾン川の源流のひとつ、マラニオン川に停泊した。この一帯はバカヤ・サミリア国立保護区と呼ばれ、熱帯雨林生態系保護区に指定されている。また、もうひとつの源流ウカヤリ川とマラニオン川が合流するポイントこそ「Birthplace of the Amazon」と呼ばれる、アマゾン川の起点である。「アリアアマゾン」での冒険クルーズは、約七〇〇キロとも言われるアマゾン川の中でも最も神聖な、そして太古から続く生態系を観察するには最適なこの一帯が舞台となる。

朝食後、ゲストはスピードボートに乗り換え、ネイチャーガイドと共にアマゾンの奥地へと出発する。ボートはいくつかの小さな支流に入り、ガイドが双眼鏡を片手にオマキザルやミツユビナマケモノなどの野生動物を次々と見つけては、指を差して教えてくれる。後に続くように双眼鏡を覗き込み、指を差した方向を凝視するが、動物たちは基本的に保護色のため、



ペルーで2番目に広いバカヤ・サミリア国立保護区で出会った動物たち。太古より続く命の神聖に触れる瞬間だ。右からダスキータイティ、ルリコンゴウインコ、アカウアカリ。



地図にも載っていないアマゾンの奥地へ、ネイチャーガイドと共にスピードボートで舵を切る。

見つけ出すのにひと苦労だ。保護区とはいえ、動物たちは、サファリパークのようにそう簡単に見える場所には姿を現さないようだ。「生き物を見つけるコツは、彼らの習性を知ることが一番です。特にアマゾンには、果実が豊富なこともあり、それらを餌とする生き物は、決まった場所に集まります。あとは慣れですね」

そう笑って話すのは、ネイチャーガイドのジョージさんだ。

川を移動中に数頭のピンクドルフィン(正式名はアマゾンカワイルカ)が姿を現した。一昔前までは、探すまでもなく、多くのピンクドルフィンが生息していたが、毎年一割ほど個体数が減少しているという。豊かなようでも、アマゾン川流域のジャングルは農園開発と異常気象により、毎日一〇〇種類以上の動植物が絶滅の危機に瀕しているようだ。

「以前はマナティを見ることもありましたが、今は自然界で、その姿を見ることはありません。我々は、イキトスにあるマナティ保護センターのサポーターや、クルーズの途中で訪問する小さな村々に医薬品や日用品などを届け、寄付活動も行



アマゾン川に棲む稀少なピンクドルフィン。

っています。アマゾン源流にあたるこの地域は、生物の多様性のみならず文化の多様性についても誇るべき地域であり、保護活動が必要なのです。しかし、近代化が進むにつれてどちらも失われつつあります。多様性を維持しながら、地域の発展に役立てば本望です」(ジョージさん)

その後も、ピラニア釣りを楽しんだり、巨大な葉の上に子どもを乗せて浮かぶ写真で有名なオオオニバスの生息地へ、ジャングルウォークを楽しんだりと、冒険という名の自然回帰は、驚きと感動が次々と押し寄せる。いくつになっても、新たな発見は心躍らせるものだ。



未踏地のシエスタ



午後は船内でゆったりとクルーズライフを満喫。屋外ジャグジーやフィットネスルームなどの設備も充実。スパトリートメントも受けられる。



冒

険から本船「アリア・アマゾン」へと戻ると、クルーたちが冷たいタオルとアマゾン原産のピンク色をしたフルーツ「カムカム」の甘酸っぱいフレッシュジュースで出迎えてくれた。それは、熱帯のジャングルから一変、五つ星のホテルへと舞音が切り替わるサインのようでもあり、このリフレッシュメントに幸せを感じずにはいられない。

ランチの後、夕方までは一休み。シエスタの時間となる。ゲストは皆それぞれアマゾン川に浮かぶホテルライフを満喫する。三階の展望デッキに横たわり読書するのもよし、雄大な景色を眺めながらジャグジーでリラククス、専任のセラピストによるスパトリートメントを受けることだってできる。また屋内ラウンジでは、ネイチャーガイドによるアマゾンに生息する動植物のレクチャー、そしてシエフによるアマゾンの素材を使った料理のデモンストレーションなども開催され、アマゾンへの理解を深めるレクチャーショーも充実



ガラス張りの窓からアマゾン川を望む全ての客室は、約23㎡のスイートルーム。寛ぎながら川面の移ろいを楽しむ。

している。

この「アリア・アマゾン」は、二〇〇七年に創設された「アクア・エクスペディション」のCEOであるフランチェスコ・ガリ・ズガロ氏の「世界の素晴らしい川をクル

ーズする現代の冒険家に、極上の快適さの中で比類なき旅の体験を提供する」という夢が具現化したものだ。〇八年に初代「アクア・アマゾン」、その三年後の一一年に「アリア・アマゾン」が誕生し、そ



開放感に溢れた船内のバー・ラウンジ。冷たい飲み物を手に同乗のゲストと談笑しながらのんびりとした午後ひとときを堪能。



ペルーで飲まれている白ブドウの蒸留酒「ピスコ」を使ったカクテル「ピスコサワー」。

れぞれアマゾン川のまだ見ぬ世界へと案内してくれる。

両クルーズ船では、アマゾンという特殊な環境を考慮し、米国コーストガード（USCG）認証の衛生システムを導入、排出されるゴミは全て船内で処理し、排水は船内の水処理装置を使って有害物質を除去しよう、と、船外に排出している。また安全面においても、AEDの設置に始まり、救急介護士や水上警察官が同乗、総勢二八名のクルーが、万全な体制でサポートしていることをホテル・ディレクターのアナが話してくれた。

それぞれが好みの場所でシエスタを満喫した後は、日没前に再び冒険が始まるまでの間、屋内ラウンジに二組、そしてまた一組とゲストが集まり始める。昨日までは出身国や名前さえも知らなかったゲスト同士だが、今はもう違う。アマゾンに冒険する友として、

早々に打ち解けられるのも、スモールシップならではの。ロンドンからやって来たという夫妻は、ご主人はロンドンマラソンの関係者で、東京マラソンにも毎年、関係者として来日しているという。ご夫人はトライアスリートで、過去いくつものレースに参加しているという。一方アメリカ西海岸からの一家は、ただ今一年をかけて世界旅行中。三人の子どもたちは、オンラインで教育を受けているとのこと。今冬には北海道のニセコでスキーを楽しむそうだ。

普段の生活では、決して知り合うことのない者同士が、偶然にも同じ時間を共有するのも旅の醍醐味だろう。ましてや、船の外は地球上に残された数少ない未踏地のひとつ、アマゾンだ。

ロンドンの夫妻がステークターピストルのように声をかける。「さあ、そろそろまた冒険の時間だ！」



汚れなき秘境の愉悅



夕

刻が迫る中、四艘のスピードボートが、川の蛇行によってできた天然の溜め池に集合した。アマゾンに暮らす先住民の移動の足となっている板張りのカヌーを体験するのだ。ゲストが二人に分かれてカヌーに乗り移ると、自ずと競争が始まった。すると、大柄なロンドンの殿方を乗せたカヌーが浸水。不本意にもアマゾン川に浸かってしまった彼を見て、皆が褐色の水へ飛び込み始めた。「アマゾン川で泳げるなんて、一生に一度あるかないかよ」と、アスリートの夫人は嬉しそうにいつまでも泳いでいた。

旅の終わりを告げるかのように、アマゾン川の彼方へと夕陽が沈む頃、スピードボート上では、ジャンパンが振る舞われ、黄金色の太陽を背にシルエットとなって浮かぶゲストたちは乾杯とともに歓喜に包まれた。そうして冒険の旅は幕を閉じた。ここには太古の地球の姿と、世界のどこにもない遊びがあるのだ。

しかし船上での楽しみは、まだ

終わりでではない。アマゾンクルーズに華を添える、料理の数々が待っている。旅の上級者たちの舌をうならせるのは、ラテンアメリカのベストレストラン50でトップ10入りを果たした、リマの「マラル」のスターシェフ、ペドロ・ミゲル・スキアフィーノ氏が監修する料理だ。アマゾンのジャングルで採れる新鮮な食材を使い、「ペルービアン」と呼ばれるペルー料理にフレンチ、イタリアン、中華、和食など、様々な要素を取り入れた、大胆かつ洗練された料理は、毎日驚きの連続だ。

「アマゾンを知ってもらうには、まずは土地のものを食べることに。薬ものなど一部の野菜を除き、食材はアマゾン産にこだわりたい。アイスクリーム以外の全ての料理は、船内の調理場で作りません。特にアマゾン原産の果物は、前菜からメインのソース、そしてデザートに至るまで、ほぼ全ての料理に使用しています」と、シェフを務めるラファエル氏は話す。おかげでアマゾンのジャングルの奥地にはな

Information

成田よりJAL便にてロサンゼルスまたはニューヨークで乗り継ぎ、リマまでJALコードシェア便が運航。ロサンゼルスより約8時間半、ニューヨークより約8時間のフライト。リマからイキトスまでは約2時間のフライト。[アクア・エクスペディションズ]では、イキトスから乗船するコースや、上流のナウタで上下船するコースなど、「[アリア・アマゾン]」、「[アクア・アマゾン]」でそれぞれ3つコースがある。
www.aquaexpeditions.com

取材協力

PROMPERU ベルギー政府観光庁
www.peru.travel/jp/

※ベルギー政府観光庁（日本語）公式アプリ「ベルギー観光」配信中。

ケントスネットワーク
www.kentosnetwork.co.jp



鈴木博美

Hiromi Suzuki

旅行ライター。旅を通じて食や文化、風土を執筆。著書に、快適な女性の一人旅に役立つ電子書籍「OL一人旅レシピ」インド編、ベトナム・カンボジア編、エジプト編、「いつもの食材で作る世界の料理レシピ」など。

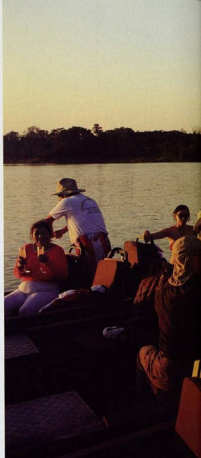
Ryoichi Sato

Ryoichi Sato

写真家。物語のある街を題材に旅行系の各媒体で活動中。旅先で出逢った「色」を大切に撮影、ジャンルは問わない。著書に「6ラオ海 中ガイドブック」（阪急コミュニケーションズ）などがある。



リマのスターシェフが監修するディナーもまた、「アリア・アマゾン」での楽しみのひとつ。フレッシュウォーターシェリンブのムケカ（川エビの煮込み）と世界最大の淡水魚のひとつパイチュのグリル(右)、アマゾンのフルーツ・マカンボのクリームブリュレ(左)など、ほぼ全てにアマゾンの食材を使っている。



カヌー体験後、イグニンク・シャンパンを楽しむゲストたち。アマゾンに沈む夕陽に乾杯。



夕陽に染まるアマゾンを航行する「アリア・アマゾン」。明日はまた、新たな冒険が始まる。

がらも、朝から焼ききたてのパンに、日本では食べることのできない、アマゾン産の珍しいフルーツがいただける。初めて出会う食材にわくわくしながらテーブルに着く。ディナーは、冒険と同じくらい楽しみとなった。

ディナーの後は、ラウンジバーでベルギー名物のブドウの蒸留酒で作ったビスコサワーを一杯。冒険の終わりとまだ見ぬ世界に乾杯する。デッキに出て漆黒に包まれた夜空を見上げると、満天の星の中で南十字星が「またいつか会いましょう」と、語りかけるように瞬いていた。